

## ヤスクニ・レポ 266

### 妻を亡くして

#### 復活信仰と信教の自由を目指す

荻野廣己(日本同盟基督教団馬込沢キリスト教会会員)

1

妻を3月末に失った、75歳。医者判断は急性心臓死であったが全く予期しないことだった。3年ほど前からパーキンソンを患っていたが良くなっている時期があって病院へは当初3ヶ月ごとであったのが1ヶ月で良いと言われて安心もしていたが、人の体は棒グラフのような一直線ではなく波立つものである。昨年秋からだったか体力が落ちてきて杖を変えたり介護申請を始めていた。痛みがはじめて別な科で見てもらったら脊椎狭窄であるとのこと。それでも痛みが治ったら近くのリハビリで体力つけようねと語っていた。しかし実は家内のことをよく理解していなかったのだと思いはいつも同じところに帰ってしまう。痛みのももだが、心の痛みや悲しみを家内が感じているほどには感じ取っていなかったと、申し訳ないと日々思ってしまう。ひと月ほどは自分で起き上がれなくなって夜の2時間おきのトイレにはうつ伏せさせ、それから腹ばいになってから抱きかかえて起こして連れて行った。こちらは明け方まで起きているからそれは苦ではない。優しく対応しているつもりであった。「私、迷惑かけるから施設行こうかしら」とポツリというから「どんなに優しい施設でもこれほどには優しくしてくれないよ」と私はそう思って言った。不思議なくらい体力がなくなったが、医師は全てを分かっているものでもないらしく、話を聞いても薬の調合を考えるばかりであった。これほど体力がないということは手足の筋力にとどまらず、体内臓器の全ての筋力が落ちていることであると後になって考えた。最近テレビで見たが血管は筋肉だという。心臓も筋肉だから生まれてから休むことなく伸縮して血液を送り出しているのだ。家内のようにあれほど体力がないと心臓ももう停止してもやむを得なかったのかもしれない。

2

私は相変わらず忙しく、たまたま前夜は完全徹夜して仕事のレポートを提出し、打ち合わせ後帰宅、夕食をとり、茶碗を洗い、蜂蜜買いに行き帰って少し横になったつもりがフーッと爆睡してしまって家内が急変に陥るその瞬間を知らなかった。徹夜なんて、なんて馬鹿なことをしたんだと自分を責め続けるが、起きていたとしても何もできなかったかもしれないよと次男は慰める。急性心臓死は場合によっては1分持たないとも書いてある。それでも私に

救いを求めた時に眠り込んで「ひろみさんは助けてくれないのだ」と失望を与えたまま死なせてしまったことが悔やまれてならない。悔やむことはいっぱいあって、葬儀には家内との幸せな生活をみなさんに紹介しようとパワーポイントを編集したが、なんで一緒にアルバム見て懐かしんだり、なんでゆっくりおしゃべりしなかったのだとまた責める。おしゃべりもしたし風呂から上がると欠かさずマッサージもしてやった「カリスマ整体師」だと冗談言っても足りなかった。感謝の言葉も足りなかった。

3

50日になろうとする。遺影の前に座って私の分の他に、家内の聖書通読の続きを読んで完了させてやろうとするし、思ったことや出来事を短歌にして本日450首になる。復活を真剣に考えるようになった。人類が生まれてその1千億人が死んだとしてそこから一人も生き返ってはいない。生き返ることと復活することとは全く異なる現象だろう。これまでの自分にとって、信仰とは「復活あり」であったが家内に会って謝りたい、感謝を述べたい、一緒にいたいとの思いがこみ上げる時、確実に復活を得ることができるかというそれは描けない。「本当だろうか」とも。復活なき人生はゴールがあやふやで意味がないと確かに思うがそれを掴みきれないでいる。

一方でメソメソして過ごしているわけでもない。今までやったことがなかった3食作り、食器洗い、洗濯もして取り入れて畳まなければならない。呆然とする時間も加わってともかく家事に費やす分では生活は変わる。仕事も打ち合わせが始まるので厄介な資料も完了させた、郷里鹿児島に関する大きなイベントも先週済ませ、その報告書も2日かかって昨日完了した、など、再び無理な生活が始まっている。

4

残された人生、やることは決まっている。闇に打ち勝ち、死を支配なさったイエス・キリストに明確に従って行くのみだ。我々は過去と現在は見えるが将来は見えない。つまり将来の復活は見えない。しかし手がかりはある。肉なる我らの現在においてイエスが確かであると認められるもの、それは私の「意志」だ。幸いにして聖霊に導かれる「意志」がある。「信仰に立つ」という意志が評価される。これなら自分のことだからよく把握できる。へブル書

は「信仰に立つ」との意志を促すし、10章36節では「忍耐せよ」という。イエスも「門を叩け」と仰る、叩くという意志を期待しておられる。人間の側の現在の意志があつてこそ、将来の再臨を見ることになる(10:37)

**「しかし、わたしたちは、信仰を捨てて滅びるものではなく、信仰に立って、命を得るものである。」**

(ヘブル10:39)

信仰に立つとはどういうことかと問われる。一人山中にあつて滝に打たれることではあるまい。室に籠って自問自答も必要ではあるが、人生はそれだけでは解を得ない。主が示された戒めは「自分を愛するように人を愛せよ」であるから社会が発生する。心の持ち方だけでなく社会のルール、制度も問うて

いくことになる。自分も人も真つ当な信仰が持てる自由な環境を作ることにもある。幸いにして信仰を内省からも見るが、制度からも問う影響を信頼する「つどい」からも得てきた。私の勉強不足はお話にならないが信教の自由の尊さを学んできた。牧師、先輩方にも連なって馬齢は重ねてきたし、西川重則兄の鋭い眼差しは焼き付いているので少しは鋼らしきものが内心にある。これからは漠然とでなく、確実な復活信仰をひたすら求めつつ、末席ながらもお信教の自由をみなさんと共に勝ち取って行きたい。

復活は 見えねどなおも 信仰に  
立っているのを 得るはわが意志

## 2022年4月15日例会奨励 「憤りの大きな踏み台に」ヨハネの黙示録14章19節 日本長老教会西武柳沢キリスト教会牧師 星出 卓也

先の14章16節ではイエス様自らが地の収穫を集め、収穫を倉に納める様子が描かれていましたが、19節では、神の憤りの大きな踏み台に投げ込まれるために集められることとなります。

**「御使いは地上に鎌を投げて、地のぶどうを刈り集め、神の憤りの大きな踏み場に投げ入れた。」**

当時のぶどうの踏み台は、今日の「樽」のようなさかぶねとは違い、板を「8」の数字のように平らにくりぬいた形に作られていました。「8」の字の上の丸の部分が丸く平らに削り取られていて、この円形の部分にブドウの実は放り込まれて、徹底して足で踏みつけられ、ブドウの汁は流れ出て、「8」の字の狭い首の部分を通して、今度は約60センチメートル程低い位置に彫り込まれている「8」の字の下の方の丸の部分に、ぶどうの汁が落とし込まれて行きました。上の丸の部分で投げ込まれたぶどうの実を、人々が踏んで踏んで、そのようにして流れ出た汁が、下の部分の丸の水盤のところ溜まってゆくという構造になっていました。

実際に人々がこの踏み台に投げ入れられたぶどうを踏む様子は、足だけではなく、洋服までもが真っ赤に染まるくらいに、人々は体全体を真っ赤に染めて、このぶどうを踏む作業をしたようです。その光景は真っ赤に染まった血を彷彿とさせるものでした。この光景は、旧約聖書で神の裁きに譬えられています。イザヤ書63章1-6節では主の復讐の日を、ぶどうを踏む者のメタファーを用いて、真っ赤に衣を染めて、ぶどう踏みをする者として描いています。

**「彼らの血の滴りはわたしの衣にはねかかり、わたしの装いをすっかり汚してしまった。」**「わたしは怒っ

**て諸国の民を踏みつけ、わたしの憤りをもって彼らを酔わせ、彼らの血の滴りを地に流れさせた。」**

終わりの日に、神がぶどうの実をことごとく刈り集める様子は、これほどに恐ろしいものです。ヨハネの福音書15章の「わたしはブドウの木で、あなた方はその枝です。」とあるような、そのようなキリストとつながる、祝福されたぶどうのイメージではありません。大バビロンがこの世の繁栄に酔いしれ、ぜいたくの限りを持ってこの世の富を謳歌した。それに対する裁きの対象としてのぶどうなのです。それを主は、踏み台の上に投げ込み、それを踏みつけ、通常であれば、農夫はそこからぶどう酒を得るのですが、ここで、主がそこから収穫を得ることはありません。収穫としてのぶどうの実ではなく、神の恐ろしい審判のしるしとして、踏みつけられ、血を真っ赤に流して、キリストの衣を真っ赤に染めるほどの、恐ろしい復讐の光景として描かれているものです。

14章19節から、神の恐ろしい審判をしっかりと読み解く者になりたいと思います。大バビロンのぶどう酒は、この世の繁栄と豊かさを象徴しているもの。それは人々を酔わせ、その魅力の虜にするものです。しかし、それはこの神の復讐の日に、恐ろしい踏み台に染まる真っ赤な血に変わるのです。それは神に祝福された繁栄ではなく、神の復讐の血に真っ赤に染めるものとなって、その本質をやがて明らかにしてゆくものです。

繁栄を求めるこの世にあつて、私たちは、この復讐の日が来ることを覚えて、繁栄に酔うこの世の在り方から日々離れ、そこから逃れ、決別し続ける者でありたいと思います。